

# 域学連携を通じた交流活動の「鏡効果」とその現代的意義

和歌山県推薦：都市農村交流アドバイザー（合意形成）

藤田 武弘（和歌山大学観光学部・教授）

## 1 地域インターンシップ活動による“農村ワーキングホリデー”

域学連携は、学生と教員とが地域の現場に入り、地域住民と共に地域課題の解決や地域づくりに取り組むことを指し、“知（地）の拠点”としての大学に期待される新たな役割として注目されています。和歌山大学観光学部では、平成19年の学部設置当初から、和歌山県内および大阪南部の市町村等の協力を得て、地域課題を学生が調査する「地域インターンシップ（LIP）」活動を実施しており、毎年学部生の過半が各地域で実施される様々なプログラムに参加しています。

農村ワーキングホリデーもその一つで、田舎暮らしや農作業に関心のある都市住民や学生を、労働力を必要とする農家が無償で寝食を提供し受け入れるという“援農ボランティア”の一形態です。

## 2 受入地域での交流活動がもたらす「鏡効果」

戦後の高度経済成長は、農村における「人（若年労働力の都市への移動）」「土地（農地の荒廃化）」「むら（相互扶助的な集落機能）」の空洞化を通じて都市と農村との格差を拡げましたが、その結果、農村住民の暮らしに対する誇りや愛着が喪われ、“限界集落”という言葉に象徴されるように故郷の将来に展望を持たない状況に置かれてきました。

しかし、よそ者・若者である都市住民や大学生との様々な交流を受け入れ始めた農村では、彼らの眼差しを通じて、田舎の日常生活に潜む様々な価値や農業・農村が有する公益的機能・役割に対する“気づき（鏡効果）”が得られ、結果として「地域のコミュニティが活性化した」「農村の将来に可能性を感じるようになった」などの声が聞かれるようになっていきます。

なかでも、農村ワーキングホリデーは、農家と共に農作業に汗を流し、農村での在りのままの生活を体験することのできる活動であることから、様々な都市農村交流の中でも最も「鏡効果」が高い取り組みとして注目を集めています。

## 3 食と農との繋ぎ直しが「関係人口」を創る

食の「外部化（中食・外食への依存）・簡便化」が進行する一方で、私たちの食を誰が何処でどのような思いで支えてくれているのか、が見えなくなっています。食の安全・安心には関心はあって

も、それを育む農業・農村が直面する諸問題には関心が及ばないという「当事者意識」の欠落です。

実際に、農村ワーキングホリデーに何度も参加した経験を持つ学生たちは、自身のキャリア選択においても、何らかの形で農業・農村を“担う・支える”仕事を選択する志向にあり、卒業後も関わりのある地域に思いを寄せる応援団として、農家を励まし続けていることが判ってきました。まさに、農村ワーキングホリデーによる食と農との繋ぎ直しが「関係人口」を創出しているのです。

#### 4 アドバイザーからのメッセージ

いま、若者を中心とする新しい“田園回帰”の波が訪れています。そして、農業・農村は、世代を超えた学びの場を実現できる可能性に満ちています。是非とも、よそ者・若者と一緒に、新しいネットワークと未来の地域をつくる手掛かりを掴んで頂きたいと思います。

写真左：大学で作成した「農村ワーキングホリデー」普及啓発パンフレット  
写真右上：和歌山県田辺市龍神村でのワーキングホリデー（稲刈り作業）  
写真右下：和歌山県かつらぎ町御所地区でのワーキングホリデー（ぶどう出荷作業）

